

咸臨丸の絆

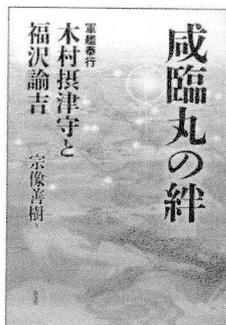
軍艦奉行木村摂津守と福沢諭吉

宗像 善樹著 海文堂出版刊 四六判256頁 定価1,728円

咸臨丸による太平洋横断航海の折、これに遣米副使(軍艦奉行)として乗艦した木村摂津守と、その従者を務めた福沢諭吉との、身分を超えた人間的な交流を描いた歴史ドキュメントである。

万延元年(1860年)1月19日に浦賀を発った咸臨丸の航海は、激烈な低気圧に襲われて難航し、米海軍のブルック大尉以下11名の米国人の手によってサンフランシスコに到達できたが、この間艦長の勝海舟をはじめ日本人船員は大半が船酔いに苦しみ、何ら航海に寄与できなかったのである。

船内で船酔いに苦しむ木村摂津守をかいがいしく世話する福沢諭吉に対して、木村はその人間性と深い教養に敬意を抱くようになり、また福沢も木村の身分の違いを感じさせない人物の大きさに惹かれ、生涯続く友情の絆を形成してゆく。



本書は木村と福沢の友情以外にも、勝海舟の艦長として考えられないような自分勝手な行動や、米人乗組員に対する日本人士官の反発など、荒れ狂う海における咸臨丸艦上の人間模様を実に生き生きと描いており、航海記として出色の内容に仕上がっている。

またサンフランシスコにおけるアメリカ側の歓迎振りや、その文物に驚嘆する福沢や日本人船員の様子も、冒険譚として楽しく読める。著者は木村摂津守の子孫につながる人物で、木村家以外の門外漢では知り得ない資料を駆使してこの物語を綴っている。

(K)